

Title	前島信次譯, ルネ・グルッセ「アジア史」
Sub Title	
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.2 (1955. 9) ,p.137(269)- 138(270)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550900-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

磨崖佛もよく、室生寺隨筆もなかなかにして難い味をもつていて、遊心を新ならしめるに十分である。

本書に唯一の遺憾は高價という點である。しかし「物は賣られ得るだけ値する」本書の内容としては當然であろう。

(淺子勝二郎)

三橋富治男著 東洋文明の史的系譜

昭和三十年一月 三和書房

廣大にして複雑なアジア各地域の歴史を統一して系統的に組織することは頗る難事であり、次に紹介するグルッセ氏の書はこの意味に於いて貴重な業績であるが、我々は前島博士の翻譯と偶々時を同じうして、こゝにもう一つ同様な企圖を持つ本書の刊行を見るに至つた。本書の著者三橋富治氏は本塾史學科出身の東洋史學者で、序文によると、本書の成立は新制大學の教養史擔當が直接の機縁をなしたが、「歴史を偶發的な諸事實のモザイクとしてでなく、その中より人類進歩の深い意味を汲み取らうと努め、出來うれば廣くアジア各地域の環境、生活様式、社會條件などを對比しながらそれぞれの生んだ文明を分析し、かつその系譜を辿つてみたかつた」と言はれる如く、誠に獨自行な新構想に基づく意欲的な書物であつて、單なる概説書やテキストの類ではない。本書は第一章序説、第二章總論、第三章各論、第四章總括の四章に

分れ、總論は中國若しくは東亞中心の東洋史を排し、廣く西亞を含めたアジア全體に互る東洋史成立の可能性を提唱し、東亞、西亞兩文明の特質と態様及び兩文明の交流について論じ、東洋史を佛教の傳播、蒙古の統一、西力東漸、資本主義の侵入という四つのモメントを以て、各時代に大別出來ると主張している。各論は中國・インド・東南アジア・西アジア等の各地域別にアジア全體の歴史と關連せしめつゝ史的展望を行つている。要するに本書は普通の概説書の域に止まるものではなく、從來、とかく各個別々に説かれていたアジア各地域の歴史を有機的に統一せしめようとした書であつて、啓發される所が頗る多い。(和田博徳)

前島信次譯 ルネ・グルッセ「アジア史」

一九五五年一月 白水社

一九五二年に逝去されたルネ・グルッセ氏が東洋學の大家であつたことは周知の所である。特に我々には一九四九年、佛國の文化使節として來朝されたので、なほ一種の親愛の感さへあつて、その著書繙讀の念切なるものがある。今回、本塾文學部講師、前島信次博士によつて、本書が翻譯されたことは吾々のかような喝望を正に癒すものであると思う。

本書のまえがきに譯者も述べてをられるようにグルッセ氏はアジア史を既に幾度も著している。初めてアジア史を世に問うたの

は一九二二年、三十八歳のときであつて、次いで二四年にはアジアの目録 *Le Réveil de l'Asie, l'impérialisme britannique et révolte des peuples* が出了。このグルッセ氏最初の二書については我が史學三ノ四(一九二四年九月)に當時、巴里に在つた松本信廣教授が逸早く紹介してをられる。この二書が後年の大家、グルッセ氏の出世作となつたのであるから、これは實に我が學界への最初の紹介である。その後、次々と述作を出して行き、最近に著されたのが本書である。なおこの間の大著のひとつたる草原帝國 (*L'Empire des Steppes*) も塾出身の後藤十三男氏によつてはやく譯出された。誠にグルッセ氏と塾との因縁淺からざるものありと言ふべきである。

本書は例のクセジュ文庫の一冊として出されたもので、グルッセ氏の數多の大著に比すれば最も短かい書物に過ぎないが、それだけ多年の成果を壓縮して最後に到達したエッセンスと見られるものであり、グルッセ氏の學風もよく窺うことが出来る。本書はその題名の示す如く、文字通りのアジア洲に關する歴史であつて、上は北京人から下は毛澤東まで、東は日本から西はシリア・アナトリアまでを包含している。これだけ龐大な時間と空間とを僅々百餘頁に盛り込まれたその手際の良さは驚歎の外はない。恐らくグルッセ氏を除いて、餘人のなし得ぬ所とすべきであらう。本書の特色は複雑なアジア各地の政治史を極めて簡明にまとめ、

これに氏の得意とする美術史を適當に織り込まれたことにあると思う。特に我が學界の比較的遅れている西アジア史に相當の頁數が割かれてをるが、この意味に於いて譯者は正にその人を得た感がある。グルッセ氏の秀れた文章は前島博士の麗筆によつて、頗る忠實に譯出せられてゐる。好適の東洋史入門書として廣く讀まれることを希望するものである。(和田博徳)

彙 報

昭和廿九年秋期見學旅行記

昭和廿九年度史學科見學旅行は、伊木先生及淺子教授御指導のもと竹田助教、河北助教の參加もあり、十月三日より七日に亙つて行われた。學生の參加は大學院三名を含めて五〇名であつた。一昨年東北、昨年關西と順次西へ向い、今年度は山陰地方、主として出雲大社附近に目的地を選んだ。史學科先輩の島根縣知事恒松安夫氏の御援助により當初予定した以上の成果を得たことは喜びにたえない。

十月三日夜東京發、翌四日夕五時四八分、玉造溫泉驛着、たゞちに宿舎に入る。

第一日目(十月五日火)晴、朝食前に附近にある玉造神社を訪